

# 離騷日乗篇

島田修三

11月7日(土) 高校時代の友人Kから所用で名古屋に寄るといふ電話。Kは某少女月刊コミック誌の編集長。栄のバーで飲む。売上部数が全盛期に比べると、かなり落ちていふとのこと。毎週、重役会のお白洲に座らされているらしい。横浜時代、同じコミックの週刊誌の方の新米編集者だった彼と元町のチャーミング・セールに出かけ、少女向けのアクセサリーだの小物を見て回ったことがある。懸賞賞品の物色につき合わされたのだった。何やら実にもう哀しい思いで、Kの真剣な姿を見ていたことを今も覚えている。

空き腹をスカツチ・ソーダに突つかせて厄年シマダゆゑ知れず悔し

11月12日(木) 夏目伸六の「父・夏目漱石」を必要があつて、本棚の隅から引つ張り出して来る。森田草平におよぶ一節がバツグンに面白い。漱石の死後、漱石邸の茶の間で、突然、草平が「気障な男さ漱石なんて。ああ気障な奴だよ。全く気障な男さ」なぞとわめいた一件は秀逸だ。「変だよこの人、急に威張り出したりして」などと応じる未亡人のペランメイぶりも妙におかしい。末つ子の愛子ばかりを愛したる漱石の気がこのごろ知れる

11月30日(月)夜半、疲労困憊して帰宅したら、某新聞社社会部記者の友人Nが広島産カラ付きの生牡蛎とワインを持って上がりこんでいた。ありあわせのやや萎びたレモンを絞って食べたが、まことに美味。ワインも水のようにサッパリとしている。急速に酔いがまわった。Nは四月の東京転勤がほぼ内定したらしい。F1プームの仕組まれた構造を批判的にえぐるコラムを連載したり、若いけれど硬派のプレスである。こんな具合に深夜、突然やって来るのだが、僕も家人も何となく心待ちにしている所がある。四月までにあと何回、会えるだろうか。

不犯とはいかなる価値かとふと思ひいたく淋しく生牡蛎啜るも

12月1日(火)午前七時前に目醒めると、二日酔いで頭が割れそうに痛い。ワインは体質に向いていないらしい。Y新聞に書いた歌壇の構造を揶揄した拙文が、何人かの歌人の神経を逆撫でしたらしく、抗議の手紙を二通ほどもらった。ともに正論であるけれど、拙文の方が真実を突いている。よって、無視。

昨夜一夜魔<sup>うな</sup>されぬしと然<sup>ま</sup>うだろ<sup>う</sup>う心いよいよ俺にも分からず

12月23日(水)夕方まで、読書と調べもの。カードが着実にたまって行き、何となく嬉しくなる。

緋の色に蓄みそめたる寒木瓜の樹下に猫また二匹ぞ寄り合ふ

12月26日(土)或る会の酒席で仲間のTと、会の運営の問題をめぐって口論。鉄板化工を生業とする男で、腕つぶしはポバイ並みである。こいつに殴られたら、たまらないなあ、と思いつつも言うべきことだけは言つて後は沈黙。深夜にいたつて、どうやら和解。「シマダさんに殴られるんじゃないかと思つて、生きた心地がしなかったよ」とニヤニヤしながらT。それはこっちのセリフだけ。

口舌の埒を超えれば黙したれ騒立ちてゆく殺氣や愉しゑ

1月1日(火) 僕の家では正月料理をほとんどしない。今年は、牛肉の巨大なカタマリを買って来て、大晦日に長時間かけてロースト・ビーフを焼いた。三が日はそれほど食べようという魂胆だったのだが、元日だけで完全に飽きた。来年こそ飽きないモノをこさえようと思うが、とどのつまり、それは熱いご飯に脂の乗った塩鮭、白菜の漬物、豆腐と油揚げの味噌汁といったレギュラー・ディッシュに尽きてしまう。来年はこれで行くか。

やみくもに喰ひたくなりて麦ト口を俺は搔つ込む泣かむばかりぞ

1月28日(木) 獅子文六の最高傑作は「海軍」でも「娘と私」でも「自由学校」でもなく、「バナナ」であると思う。午前中、「バナナ」を読む。

憂きふしの月余を過ぎてけふを繰る獅子文六の「バナナ」の面白

1月29日(金) 夜、中学三年生の息子と背くらべをしたら、父親よりもわずかに高い。「なんだ、オトウは縮んだんじゃないのか」と言いやがった。深夜、某宗教総合誌から依頼されたエッセーをねんごろに書く。

梅昆布茶シタ灼くほどを嘗め吸りシタを灼きつつ物をこそ思へ

2月19日(金) 歌壇・結社という互酬的閉鎖共同体が無性に腹立たしくなることがある。まあ、僕もこの世界にシブトク棲息して、恩恵も受けているが、生理的に耐えがたい部分があり、そいつが時に疼くのだ。歌よみの会合などで、頭が高くオウヘイだという意味のイヤミとも忠告ともつかぬことをオセッカイどもに言われることがある。コメツキバツタやチョーチン持ちになるよりは、白い目で見られている方が僕には遥かに爽やかでよろしい。

短歌ほろべ短歌ほろべといふ声の俺の私怨の淵より響かふ

2月20日(土) 午後から娘と天白川まで散歩。島田橋の脇にある公園でしばらく遊ぶ。寒いので子供の姿なし。娘そっちのけで、鞆を漕ぎまくっていたら、めまいがして来て転げ落ちそうになった。よほど悲惨な様相だったらしく、娘がペンをかいてしがみついて来る。我ながら、さうとうバカである。

円まろやかに身は育ちゆくうなる子の嗚呼まぎれなくこれ哺乳類

2月24日(水) 天白橋を歩いて渡っていると、クロガネのオート三輪と擦れ違った。三十五年ほど昔の三輪自動車である。

二気筒の懐かしいエンジン音を響かせて、クロガネは夕闇の中をヨタヨタと走り去った。で、僕が一瞬ゾツとしたのは、ドアのない寒寒しい運転席に座っていた初老の男の下半身が透き透き透き、今にも消えかかっているように見えたことである。

暮れしるき天白橋を越えむとし翹うたげ靈たまさはめく氣配つべの冷た

3月10日(水) 午後からラーメンの材料を買い出し。トン骨、トリガラ、トリの脚、チャーシュー用の豚肉のブロック、チンゲン菜、シナチク等々。

現実を統とぶる思想のまたくなし苦き煙草ぞこの貰ひもの

3月18日(木) 「モーツァルトの手紙」を読みながら、あまりの猥雑下品に呆れてしまった。モーツァルトが強度のチック症だったという説があるが、ホントかも知れない。古典音楽ギョーカイのビートたけしみたいなヤツだったのだ。

モオツアルトの卑俗に溢るる書簡集おこの天爵はさながら抑庄ストレス

4月1日(木) 毎年この日は、家人の手のこんだウソに簡単に引っかけり、セセラ笑われるのであるが、今年はなし。どうしたのかと思つたら、歯が痛いとのこと。

ほんやりとぬくとき季ときの立つ朝を桜餅うましわが身かなしも

4月7日(水) 午前中、煙草を買いがてら、近所を散歩。行きつけの喫茶店に寄つて、しばらくボンヤリする。店を出た所で、髭のE氏と出くわす。この店で知り合つたのだが、これがとんでもない博覧強記の人物で、「エスクァイア」をモーレッツな速度で読んでいたり、スーザン・ソントグの『写真論』を解説してくれたり、岸恵子に失恋した後のデビッド・リーンの映画がどう変わったか、とか場面のパフォーマンズ入りで論じたり、とにかく、まあトンデモナイ人なのである。店の人に聞くと、アパレル業界の人だという。野に遺賢はいるんだなあ。

枝垂桜はや咲きそむる小路なかばアパレル業の髭づらと遭ふ

4月9日(金) 一九六〇年に二十歳で自殺した國學院大学学生にして歌人岸上大作の日記を読むと、実にもう涙ぐましい生活記録に満ちている。とりわけ、「定食五十円、クジラ二十八円、モヤシ十円、切手十円」「牛めし六十円、レバー四十円、タマゴ五十円、キャベツ三十円、菜十円、タカセに十円」といったつましい食費の記録は、貧しかった時代を鮮明に浮かべせる。岸上とはほぼ同じような境遇、生活を負っていた寺山修司・セーネンは、岸上・セーネンと違って、こういう貧困を文学の上で克服し揚しようとして、しおおせた。寺山の方が遥かにホンモノである。

見る俺に桃花はむかしを偲ばせて貧しかりしよ昭和三十年代オールドサーティーズ

4月16日(木) 家人がモノスゴク美味しい珈琲店を見つけたというので、一緒に出かける。特にアメリカンがいいと言うので、飲んだら、薄すぎて実にマズかった。マズイじゃないか、とモンクを言ったら、そういう日もあるんだなあ、これが、とか言つて涼しい顔をしている。

痩せぎすの春の秋刀魚のはらわたの淋しき苦さ舐めつつ酌むも

4月29日(木) ドリス・デイの声は、可憐にしてセクシー、澄明にしてハスキー、晴朗にして憂鬱という不思議な振幅を持っている。曲でいえば、「先生のお気に入り」から「ドミノ」「センチメンタル・ジャーニー」までの幅である。この幅の中に一九五〇年代のアメリカが緊密にパックされているという感じが僕にはあつて、一日中、オートリヴァースでドリスを聴いていても、全く聴き飽きない。

両日をドリス・デイのみ聴きゐたれ豊かなりし国アイアアルゴイスの理想的美声を

5月4日(土) 連休だというのに、同人誌の企画打ち合わせでもって熱海の民宿に一泊。評論を並べるのが特色の雑誌で、来年度以降の総合テーマを検討しようということが集まったのだが、何のことはない、いきなり酒である。昼過ぎだというのに泥酔に近い者もいる。この調子で深夜まで飲み続ける。バカバカしくなつて僕と高校の後輩Oは先に寝たが、酒乱気味のYが、眠るたあケシカラン、とかわめきながら、われわれの部屋のドアを蹴破る。後で聞いたら、Yはシマダさんに食べてもらうんだ、と言つて、温泉卵を熱海駅前飲み屋で仕入れて来たんだそうである。温泉卵とは泣かせる。

身に深く潮の引きたる干潟あり酔ひ果てたれば其処より風立つ

5月18日(火) 僕は東京育ちだが、もう今の東京には、さほど郷愁を感じない。僕の少年時代の東京こそホントの東京だと思つている。例えば「東京物語」の東京。

## TOKIOとふ痴れ近代の果てにしていま九重の婚にぞ華やく

5月23日(日) 写真なんてものを目的とした所から、近代韻文はにわかには貧弱に瘦せて行ったと思う。外在する自然を写した所でショーモナイことである。「竹のことは竹に聞け」と芭蕉は言ったが、こんなジイサン臭いセリフを金科玉条とするのも、ある意味では実にハカナイことではないか。とにかく何が何でも自分だけが大事、自分だけが世界の仕組みも運命も知っている、いや知りたい、といったイケ顔々しい気魄だけが、豊かに潤った表現を必然化するのだと僕は確信している。

コソクなる俳人ふたり俺に来て写真大事と説くのであつた

5月27日(木) 友人の詩人Tの出版記念パーティーのために東京神田に行く。詩人がこんなにたくさん群れている現場に立ち会うのは初めてで、最初は面白かった。とにかく矢鱈と威勢がいいのである。ほか仕切ることになっていた二次会にも六十人以上が流れて来たが、とにかく詩人たちのいる一角だけ無茶苦茶な騒ぎである。次第に何だかわけの分からぬ不安を覚えて、幹事役をKさんという女丈夫を絵に画いたような歌人にバトン・タッチして、オトナシイ歌人・評論家数名と新宿ゴールデン街に遁走。ところが、そこにも詩人が押しかけて来て、ついに疾風怒涛のドンチャン騒ぎに巻き込まれてしまった。コワカッタぜ。

さんざ騒ぎ果てたる後を居残れば油虫ゴキブリだらけの穴ぞこの酒房バー

5月28日(金) 最近のロシアを見てみると、「カラマソフの兄弟」の次兄イヴァンが弟アリョーシャに語って聞かせる詩劇「大審問官」を思い出す。「いくじのない暴徒の良心を、彼らの幸福のため永久に征服し、とりこにすることのできる力は、この地上にたった三つしかないのだ。この力というのは——奇跡と神秘と教権である」と大審問官は自らの教区に現れたキリストに説いて彼を追い払うのだが、なるほどソビエト共産党は七十年の間に「奇跡と神秘と教権」との三つをなし崩しに喪って行ったのだ。彼らがロシア正教会を通してキリストに帰るわけもないから、おそらく今度はマクドナルドだの株式投資だのを信仰さ

せられるのだろう。

神学の教条墮ちたるオロシヤのものあはれに耐え難き事あり

6月4日(金)「人間、文学を識るが憂患の始めなり」と言ったのは確か蘇東坡だったが、ホントにそうだ。僕の周囲には、俗事にいっさい関心を持たず、何だか憑かれたようにフンガクまみれで生きている者が多いのだが、あれは、ちよつと練金術に没頭して、生涯を棒に振った中世人みたいで、よく考えると、ソラ恐ろしい。

牡松ねぶの香のしるき勁酒に酔ひゆけばじんじんとして苦けれ文学

6月11日(金) ロアルド・ダールの『南から来た男』をほぼ十年ぶりに読み返す。ライターの点火でもって賭けるシーンは何度読んでもヒリヒリするような凄みに満ちている。この場面に差しかかると、不思議に心はシーンと鎮まる。

ジツポーを点滅させつつ読みあたりR・ダールの賭博小説

6月12日(土) 学生時代に録音したFENのアメリカ陸海空軍軍隊特集のテープが出て来た。ノイズの矢鱈と入ったテープを聴きながら、いろんなことを思った。第二次大戦のフィリッピン戦線に従軍した父の感想によると、アメリカ兵は被弾した瞬間にもすごい声を挙げて、実にもうハテに泣き叫ぶのだそうだ。父の口吻には、このよゝな女々しい弱兵に負けてグヤジイ、というショージ君的な思いがこめられていたはずである。それは、まあ、しかし感情表現の文化的差異に過ぎないので、例えば、全盛期のスタン・ハンセンだの、ブルーザー・プロディだのは痛めつけられると、実にハテな悲鳴を挙げるけれども、無茶苦茶に強いレスラーだったものな。

いたく心のはやるマーチ聞こえあはれ米陸軍野砲連隊歌なるらし



6月18日(金) 午前中、押し入れで探しもの。奥の奥から、少年時代に熱中したH0ゲージの機関車だのレールだのパワーバックが出て来た。レールを組んで、しばらく独り遊び。モーターから煙が出たところで、再び奥の奥へしまう。

始末悪きガラクタ出で来て江の島の河豚提灯に俺はへこたる

6月20日(日) 夜、「AKIRA」(完結篇)を再読。崩壊したネオ東京に不良少年どもの自治国家を出現させる結末は予想可能であつたにしろ、やはり物語展開上、必然的な収め方だろう。だがむしろ、大西克洋はここから先を描かなければならないのではないか。金田やケイが不滅の最終兵器アキラをカサに着たイヤラシイ権力誇示的覇権主義者になつてしまふとか、ね。

国家なぞ亡ぶるがよし窶ふかく濃く熟れたる山桃ひとりし喰ふも

7月3日(土) ポーヴォワールの「別れの儀式」によると、サルトルの晩年はかなり悲惨である。大脳左半球の血管障害と狭窄によつて、しばしば昏倒し、また失禁することもあつた。身体の衰え以上に悲惨なのは、彼の情況認識が硬直し切つて、七十年代に入つても、お題目のように革命を唱えていた。毛沢東主義者としての発言は、ソ連崇拜者時代よりも教条化し、同じ毛主義者のボル・ボトの蛮行などを見て見ぬフリをしていたらしい。サルトルは老いてよいよダメになつたのだ。

カミソリを胃より吐き出す老人の芸を観てをりはかなき奇芸を

7月4日(日) 友人のFから鹿茸をもらう。中国産の袋角を日本で製薬したもので、かなり高価なシロモノらしい。何やら奇つ怪な臭いがするけれど、こういう妙薬を飲み、その絶大な効用を信じつつ、大海人皇人も壬申の乱を戦い抜いたわけだ。

能書に〈壮陽補腎の妙薬〉と朱書されぬたり何やらをかしき

7月7日(水) 夜、調べものをしようとしたが、疲労で集中できない。調べものそれ自体がそもそも全く面白くない。息子の部屋から『タッチ』第二部を二、三冊借りて来て、読む。手塚治虫が軟派とか言ってるケナシタ漫画だが、何度読んでも、ピカレスク小僧としての達也が、オトナの男に成長して行く過程が感動的だ。

面白き何ものもなし研ぎたてのナイフのごとき蒸留酒を煽る

7月22日(木) 梅雨がなかなか明けないが、雨雲がふと切れて、雲間からのぞく六月の青空はいい。一年中でいっとう明るく、青く、朗らかなんだよね。

梅雨空のしばしを晴れて明るめば青竹売りらは往来を行かな